

「主を知らなかったころ」

詩篇 23篇1～6節

聖学院大学 人文学部副チャプレン 柳田 洋夫

「私が出会ったこの一曲 ～キリスト教芸術の世界～」ということでシリーズ礼拝が持たれておりますが、本日取り上げる曲は、賛美歌第Ⅱ編41番です。この曲に、私は、まだ主イエス・キリストのことを知らなかった頃に出会いました。この曲を初めて聞いたのは、「戦場のメリークリスマス」(大島渚監督、1983年)という映画の中でした。私が高校生だった頃に公開された映画で、略して「戦メリ」と言われますが、ビートたけし、坂本龍一、デビッド・ボウイと言った人気者たちを集めて作った話題作でした。映画そのものは、なんとも奇妙なとらえどころのない感じでしたが、坂本龍一の音楽だけは妙に印象に残ったので、すぐにサントラ盤を買い何度も聞きました。このテーマ曲は有名で、最近、聖学院出身のギタリスト村治佳織さんもカバーしています。私もテーマ曲はとてもいいと思いましたが、同時に、ちょっと場違いのように収められていた曲があって、それがこの賛美歌第Ⅱ編41番でした。

この映画は、ジャワ島の日本軍の捕虜収容所に入れられたオランダやイギリス兵たちと日本兵とのさまざまな出来事や交流を描いたものです。この曲は、捕虜たちが牢屋の鉄格子につかまって、身を乗り出すようにして声をあわせて歌うというシーンで用いられていたと記憶しています。“23rd Psalm”と英語のタイトルがありましたが、何のことかさっぱりわかりませんでした。しかしこの曲が妙に心に残って、何度も聞きました。田舎に住んでいたので、学校帰りに田んぼ脇の道路を自転車で走りながら、“He makes me down to lie～”と、口ずさんだりもしました。それにしても、彼が私を横にさせるってどういうことだろう、いったい「彼」(He)って誰だろう、とぼんやり考えたこともあったように思いますが、それっきりで、ここでの「彼」とは主なる神のことであるとも知らないまま年月が過ぎていきました。

そして、私にもようやく教会に導かれる時が与えられ、初めて礼拝の中でこの第Ⅱ編41番を歌う機会が訪れたとき、私はびっくりしました。「これ戦メリじゃないか」と思ったわけです。まだ教会生活が短かった私は、戦メリのサントラの曲が賛美歌になったのかと思ったほどでしたが、もちろんそんなわけはありません。作詞はウィリアム・ウィットティングハム、作曲は諸説あるようですが、通説ではジェシー・セイモア・アーヴィンという人で、最終的には1871年頃に今のかたちになったようです。ただ、詞は、ほとんど詩篇23篇そのままであるというのが特徴的なところですが、そのことは日本語訳を見てもわかりますが、これは、宗教改革期以降の「詩篇歌」の伝統に連なるものと考えられます。

「詩篇歌」というのは、ルターの宗教改革を引き継いだカルヴァンに由来するものです。カルヴァンは、礼拝において神さまを賛美する賛美歌として最もふさわしいのは、後の世の人々が創作した歌詞による賛美歌ではなく、聖書そのものに記された賛美の言葉すなわち旧約聖書の詩篇であると考え

えました。そして、カルヴァンはフランス出身でしたので、人々が日常用いるフランス語で詩篇を歌うことができるように、詩篇のフランス語訳を試みました。この仕事は他の詩人や作曲家たちに引き継がれ、ついに 1562 年に詩篇 150 篇を全部フランス語に訳した讃美歌集「ジュネーヴ詩篇歌」が完成しました。みなさんがお持ちの讃美歌にも、いくつか「ジュネーヴ詩篇歌」が載せられています。この「ジュネーヴ詩篇歌」はその後のプロテスタント教会の讃美歌に大きな影響を与えました。ということで、今日歌い、また聞いた讃美歌も、その「ジュネーヴ詩篇歌」の伝統に連なるものであると言えます。

さて、カルヴァンは、詳細な詩篇の注解書も残しており、それを読んでも、いかに彼が詩篇を愛していたかがよくわかります。たとえば、詩篇は「魂のあらゆる部分の解剖図」であると言います。なぜかという、詩編には人間のあらゆる情念が描き出されているからです。また、詩編において「聖霊はあらゆる苦悩、悲哀、恐れ、疑い、望み、慰め、惑い、そればかりか人間の魂を常に揺り動かす気持ちの乱れを生き生きと描き出している」とも言います。詩篇に描かれていないような人間の感情や心の動きなど何一つない、ということでしょう。私自身にとっても、聖書の中で、詩篇がいちばん最初に感銘を受けたものでした。まさに、人間のあらゆる感情がそこに描かれており、そして、この上もなく崇高なものに向けられた、この上もなく力強く美しい歌がある、そう直感しました。

この23篇もそうでした。最初は新共同訳という訳で読みました。その訳ではこうなっています。「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴ひ 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」。先ほどの He makes me down to lie というところは、「主はわたしを青草の原に休ませ」と少しわかりやすく訳されています。それから、「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う」というのも、とても印象に残るところです。神さまに迎えていただき、神さまのもとに憩うとき、もはや追いかけてくるのは敵ではなく、恵みと慈しみだということです。そのようにして、この23篇は、カルヴァンの言葉を借りていうならば、神さまへの「純粋な感謝」を高らかに歌いあげた讃美であると言ってよいでしょう。

いつの間にか、この一曲の紹介というよりは、詩篇の紹介になってしまいました。是非みなさんも、詩篇を自分自身で味わってみてください。きっとすばらしい御言葉との出会いが与えられることと思います。それからもう一つ、聖書には、「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」(伝道の書 12:1)という言葉があります。みなさんは、今の若い日に、すでにこうして礼拝に招かれ、造り主なる神さまのことを聞いています。それがどれほどすばらしいことなのか、いつか感謝とともに気付かされる時が訪れることを祈り願っています。